

## 第3回「日中未来創発ワークショップin北京～未来の都市生活を考える」 企画運営スタッフレポート

早稲田大学社会科学部  
社会科学科4年  
大野晃照

### 1. 概要

2023年11月23日から11月27日までの5日間、笹川日中友好基金「日本国内に向けた情報発信の強化」事業の一環として北京に渡航した。今回の渡航は、2023年パンダ杯作文コンクール受賞者訪中団および北京大学・北京語言大学の学生を対象とする「日中未来創発ワークショップin北京」（以下、「北京WS」）の運営を主な目的とするものである。北京WSは、「X年後の若者の未来の生活シーンを描いてみる」ことをテーマとし、「都市の『気になるところ』を見つけ、『技術』と掛け合わせ、『未来の生活シーン』を想像する」ことを目標とする。商湯科技への企業訪問、チームでの北京市内フィールドワークを経て、国观智库にてディスカッションを行った。

また、北京WSの企画運営を担当した学生は、北京大学の学生と共に百度を訪問し、国際関係学院において「AIと社会生活」をテーマに意見交換を行った。

本報告書は、北京WSの企画運営を経験しての所感を述べ、意見交換でも中心的なテーマとなった「AI」についての議論から得た示唆を記述するものである。

### 2. ワークショップの企画運営を経験して

北京WSにはフィールドワークを組み込んだため、その実現可能性が企画段階における最大の懸念となった。このフィールドワークは多くの方々の助言、現地の中国人学生のサポートが無ければ実現しなかった。オンラインでの事前オリエンテーションの段階から、チームで相談して予約が必要な場所にも行く計画を立てる場面が見られた。これは運営側の想定を超えた日中の若者たちの挑戦するエネルギーであった。

実際のフィールドワークにおいては、北京の街を見ながら日本人と中国人がお互いの生活について話した。日本人と中国人が同じ時間を過ごし、お互いの背景について自由に語り合うことができたという点で、フィールドワークが果たした役割は大きい。

また北京WSのテーマとして「日中協力」という枠組みを前面に出さなかったことは、自由な発想と当事者意識をもった議論の展開に寄与したと考えられる。ディスカッションでは日中で共通の問題を解決しようとしたり、新しい環境を構築しようとしたりする場面が見られた。お互いを尊重し、傾聴する態度で議論するなかで共通点や相違点を認め合い、自分たちの未来はどうなるのかを考えたのである。ここでは日本と中国が協力するという意識の前に、日本人

と中国人が未来を共に生きるという認識を持ったことを評価したい。

北京 WS は若者たちが日中間に新しい橋を架けるものであったとすることができる。その準備に携わり、その場面に立ち会えたことは非常に貴重な経験であった。お互いの顔を知っていて、実際に話したことによる親近感、日本人からの中国の見え方、中国人からの日本の見え方に大きな影響を与えただろう。

### 3. 「AI」の利用という日中共通の課題

商湯科技、百度の企業訪問では AI 社会のビジョンが示され、北京 WS のディスカッションおよび国際関係学院における意見交換でも「AI」というテーマが中心となった。

百度の担当者は自社の強みとして、中華圏・アジア社会の文化をよく理解していることを挙げていた。中華圏・アジア社会の文化をよく理解した AI とは、学習データに依存するその AI の特性を示している。こうした特性はサービスの質を向上させる一方で、一種のバイアスとして倫理的問題を生じる可能性があり、「責任ある AI」の議論を想起させる。意見交換では、ChatGPT は「西側諸国」の、百度の文心一言は中国のビッグデータに基づいて運用されるため、その回答は特定地域の価値観の影響を受けるという議論があった。中国の企業および学生からは「西側諸国」の文化・価値観を自らのものと対置する意識が見受けられる。百度の言う「中華圏・アジア社会」において、日本はどのような存在であると認識されているのだろうか。

未来の生活を考える上で「AI」は重要なキーワードである。北京 WS では AI が浸透した未来の生活について、国際関係学院における意見交換では AI の利用がもたらす課題について議論した。これらの議論を経て、AI をどのように利用していくのかを考えることが日中共通の課題であることを認識した。

AI が高度に発達した未来で人間は一体何をするのかと学生に問われた百度の担当者は、人を幸せにする考え方をつくるのがこれからの人の仕事であると答えた。技術をどのように利用するのかを考えることが人間の役割としてさらに重要になっていくだろう。また意見交換した中国人学生のひとは、人と AI が対話するより、人と人が話し合う方が簡単かつ深い議論ができると述べた。人と人が交流することでより良い技術、そして未来を共につくることができる。結局のところ人間同士の話し合いによって人間の未来はつくられる。日中の未来は日本人と中国人が話し合わなければ始まらない。

さらに、AI をどのように利用していくのかという議論にとどまらず、どんな AI を共につくっていくかを日中で考えてみたい。日中で共同開発した AI は、日中で共通の問題を解決するような特性を持ったものになるだろう。百度のような中国企業が目指す先にあるのは東アジアを中心とした新たなサイバー空間の出現なのかもしれない。そのとき日本は東西のサイバー空間をつなぐ役割を果たすのだろうか。

### 4. 結びに代えて

昨年(2022年)は日中国交正常化50周年にあたり、2023年は日中平和友好条約45周年を迎える。これらに対する日本社会の関心は極めて低い。言論NPOと中国国際伝播集団が実施した「第19回日中共同世論調査」によると、中国に対して「良くない」印象を持っている日本人は92.2%と昨年よりも悪化し、日本に対して「良くない」印象を持つ中国人は62.9%と依然として6割を超えている<sup>1</sup>。こうした情勢下で、北京への渡航に不安を感じていたことは否定できない。

しかしながら、中国を自分の目で見て、中国人学生と交流して感じたのは、むしろ今後の日中関係に対する大きな期待であった。

ある中国人学生は「日本と中国はどんなときでも近い国」であると話してくれた。さらに、これからの日中関係は良くなっていくし、自分たちが日中をつないでいくとも言っていた。これまでの日中関係、そしてこれからの日中関係を思うと、「どんなときでも」という言葉が胸を打つ。交流した中国人学生は日本語を会話レベルまで習得しており、日本に対する関心や日中関係への意識は一般的な中国人よりも高いだろう。それでも中国において、中国人の口からこうした考えを聞くことができたのは極めて大きな収穫であった。日中関係に中国側からも働きかけていくという思いを感じることができたのである。自らも日本側から日中関係に働きかけていく決意を新たにした。

今回の日中学生交流は今後の日中関係に良い影響を与えると確信している。渡航以前の「日中両国が協力する必要がある」という漠然としたイメージから「我々が手を取り合う必要がある」という感覚を得た。今回出会った中国の友人たちとは「どんなときでも」つながり続けるだろう。

最後に、これからの日中関係を考える時期において、北京に渡航する貴重な機会を与えてくださった笹川平和財団の皆様、受け入れてくださった国観智库の皆様、全ての関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

<sup>1</sup> 特定非営利活動法人 言論NPO(2023)「第19回日中共同世論調査 日中世論比較結果」<https://www.genron-npo.net/world/archives/16585-2.html>